

ラーキン詩における文体的特質

—「教会に行く」と「ビル」における迂言的表現と韻を巡って—

宮 内 弘

ラーキンの代表的な詩の一つである「教会に行く」(“Church Going”)では、「教会」を“unlucky places”, “this cross of ground”, “this accoutred frowsty barn”, “this special shell”, “a serious house on serious earth”のように、その属性、もしくはそれと関係の深い他のことばで、より具体的に言い換えている。またこれとは別に、Bibleを“little books”, altarのことを“holy end”のように、ある特殊な物をより包括的、一般的にぼかして言い換えている表現も見られる。「ビル」(“The Building”)の詩においても、詩人は「病院」をはじめ、「患者」や「死」という不吉なことばを意識的に避け、「ビル」、「人々、誰か」(“those who”, “someone”)、「迫り来る闇」(“coming dark”)のような差し障りのない一般なことばを使って、さまざまに言い換えている。本稿では、このような迂言的言い回し(periphrasisあるいはcircumlocution)に焦点を合わせ、韻やことば遊びにも着目しつつ、互いに関連を持つ「教会に行く」と、「ビル」の二つの詩を考察していきたい。そこでまず二つの詩とその訳を掲げておく。

“Church Going”

Once I am sure there's nothing going on
I step inside, letting the door thud shut.
Another church: matting, seats, and stone,
And little books; sprawlings of flowers, cut
For Sunday, brownish now; some brass and stuff
Up at the holy end; the small neat organ;
And a tense, musty, unignorable silence,

Brewed God knows how long. Hatless, I take off
My cycle-clips in awkward reverence,

Move forward, run my hand around the font.
From where I stand, the roof looks almost new —
Cleaned, or restored? Someone would know: I don't.
Mounting the lectern, I peruse a few
Hectoring large-scale verses, and pronounce
'Here endeth' much more loudly than I'd meant.
The echoes snigger briefly. Back at the door
I sign the book, donate an Irish sixpence,
Reflect the place was not worth stopping for.

Yet stop I did: in fact I often do,
And always end much at a loss like this,
Wondering what to look for; wondering, too,
When churches fall completely out of use
What we shall turn them into, if we shall keep
A few cathedrals chronically on show,
Their parchment, plate and pyx in locked cases,
And let the rest rent-free to rain and sheep.
Shall we avoid them as unlucky places?

Or, after dark, will dubious women come
To make their children touch a particular stone;
Pick simples for a cancer; or on some
Advised night see walking a dead one?
Power of some sort or other will go on

In games, in riddles, seemingly at random;
But superstition, like belief, must die,
And what remains when disbelief has gone?
Grass, weedy pavement, brambles, buttress, sky,

A shape less recognisable each week,
A purpose more obscure. I wonder who
Will be the last, the very last, to seek
This place for what it was; one of the crew
That tap and jot and know what rood-lofts were?
Some ruin-bibber, randy for antique,
Or Christmas-addict, counting on a whiff
Of gown-and-bands and organ-pipes and myrrh?
Or will he be my representative,

Bored, uninformed, knowing the ghostly silt
Dispersed, yet tending to this cross of ground
Through suburb scrub because it held unspilt
So long and equably what since is found
Only in separation — marriage, and birth,
And death, and thoughts of these — for which was built
This special shell? For, though I've no idea
What this accoutred frowsty barn is worth,
It pleases me to stand in silence here;

A serious house on serious earth it is,
In whose blent air all our compulsions meet,
Are recognised, and robed as destinies.

And that much never can be obsolete,
Since someone will forever be surprising
A hunger in himself to be more serious,
And gravitating with it to this ground,
Which, he once heard, was proper to grow wise in,
If only that so many dead lie round.

「教会に行く」

何も行われていないのを確かめて、
私は、大きな音をたてて扉をしめながら、中に入っていく。
また教会だ。敷物、座席、石、
小さな本。日曜日のために切りとってきた花が、
今や茶色っぽくなって、無造作に置かれていた。聖なる奥まった所では、
真鍮か何かが立てかけてある。小さいこぎれいなオルガン。
ぴんと張ったような、かび臭い、無視できない静寂が
どれほど長い間、醸成されたかわからない。私は帽子をかぶっていないので、
サイクリング用のズボン留めをはずして、ぎこちなく敬意を表す。

前へ進み出て、聖水盤のまわりに手をやる。
私が立っている所から見ると、天井は一見真新しいようにも見えるが、
それは掃除をしたためか、あるいは改修したためか。誰か知っているかもしれないが、
私は知らない。聖書朗読台に上って、仰々しくて、スケールの大きな
詩章をいくつか読む。そして自分でも驚くような大きな声で
「これにて終わり」と言ってしまった。
忍び笑いが短くこだまする。扉の所に戻って
私は記帳し、アイルランドの六ペンス貨を寄付し、
ここには立ち寄る価値がなかったと考える。

しかし私は立ち寄ったのだ。実際しばしばそうしては教会に
何を求めたらいいのかわからず、いつもこのように
当惑してしまうはめになる。また教会が
完全に使用されなくなったとき、それを何に変えればいいだろうか、
あるいは羊皮紙や皿や聖体容器を鍵のかかったケースに入れ、
それらを所有しているいくつかの大聖堂を
長期にわたって見せ物にして、
残りを雨や羊に好きなようにさせてはどうであろうか。
将来我々は教会を縁起の悪い場所としてさけるのだろうか。

暗くなるとあやしげな女がやってきて
子供にある特定の石をさわらせたり、
ガンにきく薬草をとったり、ある決まった晩には
死者が歩くのを見に来たりするのだろうか。
何らかの力が一見でたらめに見えながら、
ゲームやなぞに働き続けるであろう。
しかし信心と同様に迷信も死に絶えるにちがいない。
不信心がなくなったとき、いったい何が残るであろうか。
草と雑草におおわれた敷石、茨、ひかえ壁、空、

週を経るごとに識別が難しくなる形、
ますます不明瞭になる目的。かつての教会を
求めてこの場所に最後に、本当に最後にやってくる人は
いったい誰だろうか。こんこんとたたいたり、メモをとったり、
内陣棧敷が何であるかを知っている連中のひとりであろうか。
廃虚めぐり狂、骨董品あさり、
聖職服やパイプオルガンの音管やもつ薬をかいだりする
クリスマス中毒者であろうか。

あるいは私の同類のような人であろうか。

彼は退屈で、知識がなく、亡霊のような砂が
まき散らされているのを知りながら、郊外の茂みを通して、
この地面の上に立つ十字架の所にやってくるのである。
この場所は別々にしか見いだせないもの、つまり結婚、誕生、死、
これら三つのことについて考えることを非常に長い間、
平穩に、こぼすこともなく、保ち続けてきたからである。
そのために、この特別な殻が建てられたのである。
この特別な装いをしたかび臭い粗末な建物にどんな価値があるか知らないが、
私はここに静かに立っていることに喜びを感じるのである。

それはおごそかな土地のおごそかな家であり、
その家の混合された空気の中で、我々のもろもろの抑えがたい欲求
が出会い、認識され、運命の衣を着せられる。
それだけは決して廃れることはない。
というのも、自分の中のもっと厳肅になりたいという願望に
急に目覚め、その欲望とともにこの土地に引き寄せられる
人が永遠にいるからだろう。
多くの死者が周りに眠っているということだけでも、そこは賢くなる
のにふさわしい場所だとかつて聞いたことがある。

*

“The Building”

Higher than the handsomest hotel

The lucent comb shows up for miles, but see,

All round it close-ribbed streets rise and fall
Like a great sigh out of the last century.
The porters are scruffy; what keep drawing up
At the entrance are not taxis; and in the hall
As well as creepers hangs a frightening smell.

There are paperbacks, and tea at so much a cup,
Like an airport lounge, but those who tamely sit
On rows of steel chairs turning the ripped mags
Haven't come far. More like a local bus,
These outdoor clothes and half-filled shopping bags
And faces restless and resigned, although
Every few minutes comes a kind of nurse

To fetch someone away: the rest refit
Cups back to saucers, cough, or glance below
Seats for dropped gloves or cards. Humans, caught
On ground curiously neutral, homes and names
Suddenly in abeyance; some are young,
Some old, but most at that vague age that claims
The end of choice, the last of hope; and all

Here to confess that something has gone wrong.
It must be error of a serious sort,
For see how many floors it needs, how tall
It's grown by now, and how much money goes
In trying to correct it. See the time,
Half-past eleven on a working day,

And these picked out of it; see, as they climb

To their appointed levels, how their eyes

Go to each other, guessing; on the way

Someone's wheeled past, in washed-to-rags ward clothes:

They see him, too. They're quiet. To realise

This new thing held in common makes them quiet,

For past these doors are rooms, and rooms past those,

And more rooms yet, each one further off

And harder to return from; and who knows

Which he will see, and when? For the moment, wait,

Look down at the yard. Outside seems old enough:

Red brick, lagged pipes, and someone walking by it

Out to the car park, free. Then, past the gate,

Traffic; a locked church; short terraced streets

Where kids chalk games, and girls with hair-dos fetch

Their separates from the cleaners — O world,

Your loves, your chances, are beyond the stretch

Of any hand from here! And so, unreal,

A touching dream to which we all are lulled

But wake from separately. In it, conceits

And self-protecting ignorance congeal

To carry life, collapsing only when

Called to these corridors (for now once more

The nurse beckons —). Each gets up and goes

At last. Some will be out by lunch, or four;
Others, not knowing it, have come to join
The unseen congregations whose white rows
Lie set apart above — women, men;
Old, young; crude facets of the only coin

This place accepts. All know they are going to die.
Not yet, perhaps not here, but in the end,
And somewhere like this. That is what it means,
This clean-sliced cliff; a struggle to transcend
The thought of dying, for unless its powers
Outbuild cathedrals nothing contravenes
The coming dark, though crowds each evening try

With wasteful, weak, propitiatory flowers.

「ビル」

最も立派なホテルよりも高くそびえ立つ、
光輝く蜂の巣のような部屋が何マイルも先から際だって見える。
その周りでは前世紀からの大きなため息のように、
密集した肋骨のような通りが起伏しているのを見てもよ。
門衛はみすぼらしい。入り口に乗り付けるのは
タクシーではない。ホールや
蔓草にはぞっとするような臭いが漂っている。

飛行場のラウンジのように、ペーパーバックや
カップ一杯でいくらのお茶がある。しかし何列にも並んだスチール製の椅子に、

おとなしく座って破れた雑誌の頁をめくっている人々は
遠くからやってきたのではない。田舎のバスの中の光景という方がぴったりだ。
外出着や半分物を入れた買い物袋、
落ちつきのない顔やあきらめた顔。
数分おきに、看護婦らしき人がやって来ては

誰かを連れていく。他の者はコップを
受け皿に戻したり、せきをしたり、落とした手袋や
カードを拾おうと座席の下の方にちらりと目をやる。
家庭も名前も急に宙に浮き、
奇妙なほど中性の場所にひっかかっている人間たち。ある者は若く、
ある者は年老いているが、大部分は
えり好みや希望はもはや望み得ない漠とした年齢の者で、みんな

ここに、何かがおかしくなると告白しにやってくる。
重大な類の故障に違いない。
というのも、病気を直すためにそれがどれほど多くの階を
必要としているか、今までにそれがどれほど高くなっているか、
そしてどれほどのお金が、費やされたことか想像してみよ。
時計を見てもよ。平日の11時半だ。
これらの人々は、日常の回路からひきはずされたのだ。

自分の行くべき階に登っていく時、人々はさぐりをいれながら、
どのようにしてお互いの目を覗いているかを見てください。途中で、
すりきれるまで洗われた共同病室の服を着た誰かが車椅子で通り過ぎる。
彼らもまたその人を見る。物も言わない。
共通に背負い込まされたこの新しいことがわかって彼らは口を閉ざすのである。
というのも扉を通って行くと部屋があり、それを通っていくとまた部屋がある。

さらにまだ部屋があって一部屋向こうに行くにしたがって

帰ってくるのが難しくなる。彼がどの部屋にいつ入るかは誰も

わからない。当座は待つて庭を見おろしてみるがいい。

外はなつかしい風景がひろがっているように見える。

赤い煉瓦、保温材で包まれたパイプ、そして誰かが

そのそばを自由になって駐車場に歩いていく。それから門を出ると、

自動車が走っている。鍵のかかった教会。子供が

石けり遊びをしている短い段々坂道。おさげを結った女の子が

クリーニング屋からセパレーツをもってくる。ああ外界、

恋やめぐりあいはこの誰の手にも

届かないところにある。私達みんなが引き込まれるが、

別々に目覚める、きわめて非現実的で感動的な夢。

その中で自惚れと自己防衛的な無知が凝固している状態で

私達は人生を送っているが、この廊下に呼び出されると

それはたちまち

崩れさってしまうのである。(今もう一度

看護婦が手招きする)。それぞれの人は立ち上がってついに

行ってしまう。昼食までに出ていく人もいれば、四時までに出ていく人もいる。その

ことを知らないでまだ見たこともないような集まりに加わりに

やってきた人もいる。彼らの白い列は上の階の人々と別に休んでいる。

女、男、老人、若者、これらはこの場所で通用する、

唯一のコインの個々の実体をそぎ落とした

両面なのだ。みんないつか死ぬことを知っている。

今というわけではないし、ここでというわけではないだろう。しかし結局は

ここと同じようなどこかで死ぬ。この、すばっと完全に切りとられた崖、
これがその意味するところであろう、死ぬかもしれないという考えを
乗り越えようとする必死のものがき、もしその力が
教会の建物に打ち勝たなければ、何も
迫り来る闇に逆らうことはできない、大勢の人が毎晩、

無駄な、か弱い、見舞いの花をもってきて闇のご機嫌をとろうとしても。

＊

最初に「教会に行く」を見てみよう。

Once I am sure there's nothing going on
I step inside, letting the door thud shut.
Another church: matting, seats, and stone,
And little books; sprawlings of flowers, cut
For Sunday, brownish now; some brass and stuff
Up at the holy end; the small neat organ;
And a tense, musty, unignorable silence,
Brewed God knows how long. Hatless, I take off
My cycle-clips in awkward reverence,

何も行われていないのを確かめると、
私は大きな音をたてて扉を締めながら、中に入っていく。
また教会だ。敷物、座席、石、
小さな本。日曜日のために切りとってきた花が、
今や茶色っぽくなって、無造作に投げ出されている。
聖なる奥まった所では、真鍮か何かが

立てかけてある。小さいこざれいなオルガン。

張りつめた、かび臭い、無視できない静寂が、

どれほど長い間、醸成されたかわからない。

私は帽子をかぶっていないので、かわりに

サイクリング用のズボン止めをはずしてぎこちなく敬意を表す、

まず詩の話者はお祈りが行われていないことを確かめて、教会の中に入る。次に教会の中にあるさまざまな物がリストアップされるが、それらはことごとく教会の權威や、威光が取り除かれ、日常のありふれた物として無造作に呈示されている。例えば、聖書や讃美歌集のことが“little books”,祭壇 (altar) やそこに飾られている物が “some brass and stuff/ Up at the holy end”とそっけなく突き放したように表現されている。とりわけ“stuff”, “holy end” には話者の無知と無関心さが表れているといえよう。このような表現からもうかがえるように、第一連は宗教に対して何の関心も持たない外人観光客が、教会を面白半分に覗き見するような風情があり、詩人は宗教に対して無知、無関心を装っているかのようである。童話や物語の語り口を思い起こさせるような、詩の書き出し“Once I am sure there’s...” や擬音語“thud shut”からも、話者が教会に対して敬意を払っていないことがわかるであろう。話者のふざけた、人を食ったような態度は第一連の最後の文（「私は帽子をかぶっていないので、かわりにサイクリング用のズボン止めをはずして、ぎこちなく敬意を表す」）でさらにはっきりとしてくる。

第二連の中頃からは口語的文体に代わり、やや専門的な語 (“lectern”) や大げさな文語的な語 (“peruse”, “hector”, “endeth”) が出てくる。

Mounting the lectern, I peruse a few

Hectoring large-scale verses, and pronounce

‘Here endeth’ much more loudly than I’d meant.

The echoes snigger briefly.

聖書朗読台に上って、仰々しくて、

スケールの大きな詩章をいくつか読む。

自分でも驚くような大きな声で「これにて終わり」と言ってしまった。

忍び笑いが、短くこだまする。

これらの形式ばった語こそ厳粛な教会の場面にふさわしいが、宗教色を排除した文体の後にでてくると、どこかわざとらしさを秘めたおかしさが感じられる。このおかしさは、普通の言い方であると思われる *The snigger echoes* の主語と述語とをひっくり返してできた詩的表現 "*The echoes snigger*" によってさらに倍加される。教会を出る前に詩人はほとんど無価値な「アイルランドの6ペンス貨を寄付し」 ("*donate an Irish sixpence,*")、教会に対して挑発的かつ冷笑的ポーズをとるのである。

ところが第三連の "*yet*" からトーンが変わって転調の趣を呈する ("*Yet stop I did:*"). 詩人はここに至って宗教的黙想にふけり始めるのである。その際、第一連で見られた、外人観光客が用いるような素人っぽいまわりくどい言い換えとは対照的に、「羊皮紙や皿や聖体容器を鍵のかかったケースに入れ...」 ("*Their parchment, plate and pyx in locked cases,*") のように教会（宗教）に詳しい人でなければ知らないような専門的な単語をずばり使っているのである。一見矛盾しているようであるが、よく考えてみると、このことは話者が今まで観光客のように皮相的観察者のマスクをかぶり、宗教に関して無知、無関心を装っていたからに他ならない。しかし彼はきまじめな宗教家などでは断じてない。彼はあくまで教会から距離を置き、「教会が完全に廃れてしまえばそれを何に変えればいいのか」 ("*Wondering, .../When churches fall completely out of use/ What we shall turn them into,*") という相変わらずとぼけたような質問をするのである。彼の問いかけは人を食ったようでいながら、それでいて宗教の本質の一端をついているものなのだ。彼は宗教とは果たして人間にとって必要なものだろうかなどと大上段きって真正面から問いかけたりはしない。照れくさくてそんなことはできないのである。かわりに彼は、斜から、間接的に問いかける。「かつての教会を求めてこの場所に本当に最後にやってくるものは一体誰だろうか」 ("*I wonder who/ Will be the last, the very last, to seek/ This place for what it was;*") と。

第五連でも難解な教会用語がさらにでてくるが、ラーキンのユーモアはこれらの単

語の言葉遊びによっても生まれる。最後の教会の信者を表す語がやはり迂言的に表現されているが、これら「廃虚めぐり狂」(“ruin bibber”, なお“bibber”は大酒飲みの意味)や「クリスマス中毒者」(“Christmas-addict”)は第一連の“brew”とともに、アルコールを連想させ、信者がアルコール中毒者と重ねられているような印象を与える。(また“randy”は「好色な」という意味もあるため、アルコール中毒者で好色な信者のイメージが浮かび上がってくる。)さらに教会自体も次の連で「こぼすことなく非常に長い間、平穩に…を保ち続けてきた」(“it held unspilt/ So long and equably …”)とあるように、ワインを入れる容器にたとえられている。最終連では「その家のまじりあった空気の中で、」(“In whose blent air…”)において使われている、“blent”もやはり「(酒を)ブレンドする」という意味を含み、アルコールの比喻を一層強める役割を果たしている。このように詩人は不遜にも教会や信者を好色なアルコール中毒者と重ね合わせているのである。第一・二連で既に見た教会を揶揄するような冷笑的態度がここにも見られるのである。

さらに冒頭で述べたように、教会のことを“this cross of ground”, “this accoutred frowsty barn”, “this special shell”, “a serious house”と呼んでいることに注目したい。初めの“this accoutred frowsty barn”「この特別な装いをした、かび臭い、粗末な建物」(“barn”はCOD⁹によると *derog. a large plain or unattractive house* とある)は一見したところ、教会を表していないように見えるが、語源を調べてみると accoutre は「(僧侶に服を着せる) 聖具室係」を意味する *coustre* からきていると推察される (OED²) ので、語源の上では教会につながっているといえよう。またあとの“robed”にも意味の上からつながっていく。“frowsty”は *frowzy* の異形であり、「かびくさい」の他に、「うすぎたなく、だらしない」の意味もある。“shell”は「(内部ががらんだ建物の) 外側」を表す。これらの語は教会を奇妙なほどに、精神性を欠いた粗末な建物として表しているのである。

しかしながら詩人は全詩を通じて単調に教会を揶揄するばかりではない。最後の二連ではこの詩の主題ともいえるべき教会が持つ存在理由や意義を彼独特の言い回しで述べている。つまり教会は、三つの重要な節目である結婚、誕生、死を、儀式の形式を借りて長い間保持し続け、それらを統一してきたのである。また、彼が立ち寄る価値

がないと思っても教会に立ち寄ったのは「ここに静かに立っていることに喜びを感じる」(“It pleases me to stand in silence here;”) からであり、「彼の心の中の厳粛になりたいという願望」(“A hunger in himself to be more serious”) が教会を見て目覚めたからである。そして詩人は、「その欲望と共にこの土地に引き寄せられる人が永遠にいるだろう。多くの死者が周りに眠っているだけでも、そこは賢くなるのにふさわしい場所だとかつて聞いたことがある」(“And gravitating with it to this ground,/ Which, he once heard, was proper to grow wise in,/ If only that so many dead lie round.”) と述べ、最後は照れ屋の彼らしく、幾分教会から距離を置きながら、ユーモラスに詩を結んでいる。

もう一つ忘れてはならないことは単語の緊密なネットワーク（このことは、語のレベルにおいてこの詩が cohesive であることを示している）がことば遊びを一層効果的にしているということであろう。例えばタイトルの“Church Going”の“going”は第一連の“going on”「起こる」、「続く」、第4連の“go on”「働く（機能する）」、“gone”「なくなる」へとつながっていく。こうして詩のタイトルが持つ三つの意味「お祈りに行く」「（観光客）のように、（建物としての）教会を見に行く」、「（制度としての）教会がなくなる」がより効果的に呈示されるのである¹⁾。また“frowsty”は第一連の“musty”とつながっているし、最終連の“serious”は三回用いられているが、それが語源的に“gravitating,”（この単語はラテン語 *gravis*= *serious* からきている）と結びついている。さらに“gravitate”は「～にひかれる」という意味で“tend to”と、また音声的にも、“ground”, “grow” と結びつく。これらはウェイルズが既に指摘していることであるが²⁾、さらにつけ加えるならば、“gravitate”は最後の場面の墓場を表す *grave* とともに語形が似ているし、*grave* はまた「まじめな」という意味で“serious”と再び結びつく。このように単語が円環を描きながら互いに緊密なネットワーク（lexical cohesion）を形成していく過程で、ことば遊びが生まれ、それが宗教の主題と密接にからみついていくのである。

以上見てきたように、本詩において、ことば遊びと迂言的表現は教会（宗教）をさまざまな角度から、ユーモラスに、また冷笑的に表現する手段として大きな役割を果たしているのである。その結果、非常に深刻で重い宗教的テーマにユーモアやアイロニ

ーが持ち込まれて、詩がより重層的なものになっている。

次にあげる「ビル」(“The Building”)という詩において、詩人は「病院」をはじめ、「患者」や「死」という不吉で縁起の悪いことばを意識的に避け、「ビル」、「人々、誰か」、「迫り来る闇」のような差し障りのない輪郭の曖昧なことばを使って、さまざまに言い換えている。これは、「教会に行く」で見られた迂言的表現の一種で、婉曲語法(euphemism)と呼ばれるものである。「教会に行く」ではユーモラスな冷笑的効果を生み出していたのに対して「ビル」のそれは詩のテーマ全体と微妙に絡みあっているように思われる。このことをふまえて「ビル」の詩を読んでいこう。

Higher than the handsomest hotel
The lucent comb shows up for miles, but see,
All round it close-ribbed streets rise and fall
Like a great sigh out of the last century.
The porters are scruffy; what keep drawing up
At the entrance are not taxis; and in the hall
As well as creepers hangs a frightening smell.

最も立派なホテルよりも高くそびえ立つ、
光輝く蜂の巣のような部屋が、何マイルも先からはっきりと見える。
その周りで、前世紀からの大きなため息のように、
密集した肋骨のような通りが起伏しているのを見てもよ。
門衛はみすぼらしい。入り口に乗り付けるのはタクシーではない。
ホールや蔓草にはぞっとするような臭いが漂っている。

第一連の初めでは高くそびえ立つ立派な「ビル」は一瞬近代的な「ホテル」のイメージを喚起するが、そのすぐ後で、それを打ち消すようなイメージが次々とでてくる。「ビル(病院)」の外観の立派さはその中にいる惨めな人々(患者)をあざ笑うかのよ

うである。起伏している「肋骨のような通り」は苦しそうに息をしているやせた病人を思い起こさせる。入り口にはホテルの着飾ったポーターではなく、「みすぼらしい門衛（ポーター）」がいる。そこに乗り付けるのは「タクシー」ではなく多分救急車であろう。「蔓草（“creeper”）」はホテルのロビーに飾られている美しくてロマンをかきたてるものではなく、「這うもの」という文字通りの意味がきいていて、這っている病人のイメージが浮かび上がってくる。このように、詩人はまず「病院」と異なった明るい積極的な価値を持つ「ビル」（ホテル）のイメージを喚起しながら、あざ笑うかのように、その後で間接的に「病院」を連想させるイメージや語を衝突させるのである。彼は、輪郭の曖昧な「ビル」の上に、「ホテル」と「病院」という、明と暗の対照的なイメージを重ね合わせることにより、後者の惨めさをより一層強調しようとしているのである。

第二連でもこれと同様な構造がみられる。「病院」や患者だとわかっている、詩人は意地悪でもするかのように、そうとは明言せず、迂言的表現ではぐらかす。今度は「ホテル」の代わりに、やはりロマンをかりたてるような「空港のラウンジ」を思わせるイメージが一瞬呈示されるが、すぐそれは「病院のラウンジ」の光景であることが示唆される。「破れた雑誌を読みながら、何列にも並んだスチール製の椅子に、飼い慣らされた動物のようにおとなしく座っている人々は遠くからやってきたのではない」（“those who tamely sit/ On rows of steel chairs turning the ripped mags/ Haven't come far.”）。ホテルや「空港のラウンジ」で見受けられる、旅行に出かける人々や飛行機で遠くからやってきた人々の期待にみちた顔とは対照的に、もはや自分の意志で自由に行動できず運命を受動的に受け入れるしかない、惨めで弱い立場の患者が描かれているのである。（ここでも患者が、タイトルの「ビル」と同じように、迂言的にさまざまに言い換えられている[“those who”, “someone”, “the rest”, ...] ことにも注意しておきたい。）彼らは、「田舎のローカルバス」のような待合室で、「落ちつきのない、あきらめた表情をしている」（“faces restless and resigned”）。また「残りの者はコップを受け皿に戻したり、咳をしたり、落とした手袋やカードを拾おうと、座席の下をちらりと見やったりする」（“the rest refit/ Cups back to saucers, cough, or glance below/ Seats for dropped gloves or cards”）のだ。もともとラーキンが「ブリーニーさん」（“Mr

Bleaney”)や「ドカリーと息子」(“Dockery and Son”)に見られるように、惨めな立場の人々の描写が得意であるが、この作品ではこれらの人々が個性を持った具体的な個々の人としてではなく、機械のような物として(「どこかがおかしくなった。重大な類の故障に違いない」[“something has gone wrong./ It must be error of a serious sort”])、あるいはいささか唐突ではあるが、一般的な無色透明の人間(「家庭も名前も急に宙に浮き、奇妙なほど中性の場所にひっかかっている人間たち」[“Humans, caught/ On ground curiously neutral, homes and names/ Suddenly in abeyance;”])として呈示されていることに特色がある。やがて「看護婦らしき人」(ここでも迂言的表現[“a kind of nurse”])が使われている)が患者を冷ややかにどこか遠い国(あの世)にでも連れていくかのように呼びにやってくるのである。(これは第五～六連の「さらに一部屋奥に行くにしたがって、それだけ帰ってくるのが難しくなる」[“each one further off/ And harder to return from;”])につながっていく。)このように個々の人間がすべて個性を剥奪され一般化されてしまう病院を表すのには、「ビル」という幾分冷ややかで突き放したような、一般的な語こそふさわしいといえよう。以上見たように、詩人は“The Building”という単語を通して、一方で立派な「ビル」がかもしだす希望に満ちた、明るいイメージをちらつかせながら、他方で徐々に読者を、「病院」がもつ冷やかな側面に引きずり込んでいく。言い換えれば、漠然とした「ビル」がかもしだす明と暗のイメージのギャップがラーキンのアイロニーを生み出しているといえよう。そしてその「ビル」は病気の重大さに比例して、階をふやし、高くなるのである。「ビル」が高くて立派であればあるほど、それだけ患者のかかえる病気が重いことを意味する。次にこの場面で使われている“it”が何を指しているかを考えてみよう。

For see how many floors it needs, how tall

It's grown by now, and how much money goes

In trying to correct it.

というのも、それを直すためにそれがどれほど多くの階を

必要としているか、今までにそれがどれほど高くなっているか、

どれほどのお金が費やされているか想像してみよ。

ここの“it”は勿論「病氣」を指しているのであるが、初めの二つの“it”は「ビル」を指しているかのような錯覚をおこさせないだろうか。このような代名詞の使用を通して、「病氣」と「ビル」とが合体し融合していくような感じを与えることは否定できないであろう。

第五連になるとさらに病院の内部が描写される。病院の扉の中には部屋があり、またその部屋の奥にはさらに別の部屋があって、奥に入れば入るほど、そこにいる患者は重病で、元気になって戻ってくる率が低くなるのである。この場面では、一度入ってしまえば二度と出られないダンテ的な地獄のイメージが浮かび上がり、どこかアレゴリーの様相を呈すようになる。

ふと病院の内側から外の世界に目をやると、これまで何気なく見ていた世界、何でも無いような光景がとてつもなく貴重なもののように見えてくる。とりわけ（「子供が石けり遊びをしている短い段々坂道。おさげを結った女の子がクリーニング屋からセパレーツを持ってくる」（“short terraced streets/ Where kids chalk games, and girls with hair-dos fetch/ Their separates from the cleaners-”）情景や「病院から無事に解放されて、誰かが赤煉瓦の建物のそばを歩いて駐車場に向かっている」（“someone walking by it/ Out to the car park, free”）姿が生き生きと描かれていることに注意したい。また「（日常の）世界よ、この世の恋やめぐりあいはこの（病院の）誰の手にも届かない所にある。」（“O world,/ Your loves, your chances, are beyond the stretch / Of any hand from here!”）にも実感がこもっているように思われる。このように病院から見た外の日常生活はまさに非現実的な夢のような世界であり、死の世界こそ、より現実味を帯びた日常の世界だという逆説が成り立つ。言い換えれば、死が日常生活の中に入り込み、死と直面しなければならない患者は病院の「ビル」の中に入ることによって、初めて夢のような外界の非現実的な日常生活から目覚め、真の現実世界（死）を垣間見ることができるのである。

ところでこの詩が、「教会に行く」と関連深いことは多くの批評家が指摘している通りである³⁾。詩の途中から、タイトルの“The Building”は「病院」だけでなく、「教会の

建物」のことも示唆し始めるように思えてくる。「病院」と「教会」には共通点も多い。まず病気を直すのが「病院」であるのに対して、心の病気に対処するのが「教会」である。また両方とも「深刻な類の過ち」(“error of a serious ¹⁾ sort”)を癒す役目を持つ「深刻で厳粛な家」(“a serious house”)であり、死と深い関わりを持っている。次に語のレベルにおいて、一方に属する語が他方にも転用されている例をいくつか見てみたい。“Here to confess that something has gone wrong.”のconfessはふつう教会で用いられる単語であるが、ここでは悪いところを「病院」に「告白」しに行くという意味で使われている。また「自分に定められた階に登る」(“climb / To their appointed levels”)も「天国に登る(地獄に落ちる)」を連想させるため(cf.one’s appointed lot 定められた運命)、宗教的な響きを持っていることは否定しがたい。あるいはこの病院の「まだ見たこともないような会衆に加わりにやってきた人もいる」(“Others,...have come to join/ The unseen congregations”)の中の“congregations”も「患者」という意味に転用されていることはいうまでもないであろう。このようにして「病院」と「教会」のイメージが重なり合っていくが、この重なり合いを通して、両者がほとんど同じ機能を果たしていることが示されているのである。しかし第6連に“a locked church”とあるように、「教会」の方はその門を既に閉ざしていて、本来の役割をもはや果たしていないことが示唆されている。そこで「教会」に代わって「病院」が病気や死に立ち向かう使命をになわされているのだ。「教会」が無力であることが判明した今、この難局に立ち向かうのは「病院」だけなのである。

... All know they are going to die.

Not yet, perhaps not here, but in the end,

And somewhere like this. That is what it means,

This clean-sliced cliff; a struggle to transcend

The thought of dying, for unless its powers

Outbuild cathedrals nothing contravenes

The coming dark, though crowds each evening try

With wasteful, weak, propitiatory flowers.

... みんないつか死ぬということを知っている。

今というわけではないし、多分ここでというわけではないだろう。

しかし結局はここと同じようどこかで死ぬ。

この、すばっと完全に切りとられた崖、これがその意味するところであろう。

死ぬかもしれないという考えを乗り越えようとする必死のものがき、

もしその力が教会の建物にまさるのでなければ、

何も迫り来る闇に、逆らうことはできない。

大勢の人が、毎晩、無駄なか弱い見舞いの花を持ってきて闇のご機嫌をとろうとしても。

ところが「病院」の使命はあまりにも重い。もし「病院」が患者を守ることができなければ、患者はまっ逆さまに絶壁から落ちて死んでしまうだろう。彼らはいってみれば、絶体絶命の状態ですと向かい合っているのである。死に立ち向かうことが使命である「病院」についても同じことが言えるであろう。「病院」も死に対して断崖絶壁の上で必死に戦わなければならない。「教会」が衰弱した現代において「病院」こそが死に抵抗する最後の砦なのである。しかもその「砦」は空高く聳え立つ「教会」の建物よりもさらに高くなければならない。ここに至って病院の「ビル」は、現代の病氣や死に抵抗しうる、最後の「砦」のシンボルとしての役割をになっているように思われる。しかしこの「砦」も所詮は「教会」と同じように、無力な人間が抱くはかない幻想に過ぎないことが、いかにもうつろに響く“unless”や無益な見舞いの花によって示唆されている。「教会に行く」でも花が枯れて茶色になっている場面が出てくるが、「ビル」においても見舞いの花がむなしく無駄に送り届けられる場面で、「病院」も「教会」と同じ運命をたどることが強く示唆されて詩が終わるのである。

本詩では「病院」をはじめ、「患者」や「死」という不吉なことばが、「ビル」、「人々」、「迫り来る闇」のような差し障りの無い一般的なことばで迂言的に言い換えら

れている (euphemism) ことを見てきた。随所に病院の待合室の場面をはじめとしてリアリズム的な描写が見られることから、この詩は「病院」についての写實的な詩を迂言的に表現したものと解釈することができる。しかしまた同時に、この詩を文字通り「病院」に関する詩に限定する必要もないであろう。詩が進むにつれて、輪郭のぼやけた迂言的な“The Building”というタイトルによって、「病院」のイメージを核とした、さまざまな「ビル」や「建物」のイメージが喚起されるからである。やがて「教会」と「病院」のイメージが重なり合った“The Building”（「ビル」、「建物」）は、断崖のように空高く聳える「砦」として我々の目の前にそそり立つのである。“The Building”は、ダンテ的な地獄のイメージに見られるようなアレゴリーの要素をも加えながら、病気や死に抵抗しようとする現代人の空しい希望が託された、最後の「砦」のシンボルになっているように思われる。このように、写實的に病院を表していた“The Building”が徐々にさまざまなイメージを重ね合わせながらシンボル化していく裏で、上で見たように迂言的表現が少なからぬ役割を果たしていることを見落としてはなるまい。

最後に韻、韻律についてふれておきたい。「教会に行く」では、基本的には弱強五歩格で、9行からなる連が7連あり、韻のパターンは、規則的なababcadcdである。しかしまた同時によく調べてみると、かなり多くの韻は子音は同じでも母音が異なる不完全韻であることがわかる。ここに、詩の前半部で顕著であった、話者の「教会」に対する懐疑的な声を読み込むことも可能であろう。もともとこの詩では前半部に見られる口語的な文体や人を食ったようなふまじめな態度と後半部の文語的な文体といやにきまじめな態度とが奇妙に並存していて、本詩に特有な魅力を与えているのであるが、この混交した文体が、おおむね規則的な押韻パターンや韻律と、不完全韻との混合に符号しているようにも思われる。

次に、「ビル」に移ろう。ふつう押韻パターンは連を単位にして構成されるが、「ビル」においては、連単位の押韻パターンが見られないことに注意したい。この詩は全部で9連と最後の1行からなっていて、それぞれの連は7行で構成されている。ところが、押韻パターンは8行から成り立っていて (abcdbdcad)、連の構成とは一致しな

い。すなわち、最初の押韻パターンは第二連の1行目まで続き、二番目のものは第三連の2行目まで続くというふうに、連が進むごとに、韻のパターンは1行増しに次の連に食い込んでいく。ここで病院の部屋のようにすをもう一度思い起こしておきたい。第五～六連にかけて、部屋の奥にはまた部屋があり、さらにその部屋を通って行くとまた別の部屋があるという趣旨のことが書かれている。このような部屋の構造はとりもなおさず、韻が次の連にだんだんと食い込んでいく現象と二重写しになるような印象を与える。(ちなみに stanza の語源はイタリア語の「部屋」である。)そして最後の1行(64行目)でこれまで別個に展開していた連と押韻パターンが合一するが、これと呼応するかのように「ビル」は最後の「砦」と化して詩が終わるのである。

注

テキストは Anthony Thwaite (ed); *Philip Larkin: Collected Poems*, London: The Marvell Press and Faber and Faber, 1988 を用いた。

- 1) Timms, 83.
- 2) Wales, 94-95.
- 3) Timms, 130; Brownjohn, 21; Everett, 247; Rossen, 34; 後藤, 77-88.
- 4) 下線は筆者による。以下同じ。

参考文献

- Booth, James *Philip Larkin: Writer* Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1992.
- Brownjohn, Alan *Philip Larkin*, London: Longman, 1975.
- Everett, Barbara *Poets in Their Time*, Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Petch, Simon *The Art of Philip Larkin* Sydney: Sydney University Press, 1981.
- Rossen, Janice *Philip Larkin: His Life's Work* Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1989.
- Swarbrick, Andrew *Out of Reach: The Poetry of Philip Larkin*, Basingstoke: Macmillan, 1995.
- Timms, David *Philip Larkin*, Edinburgh: Oliver & Boyd, 1973.
- Wales, Katie "Teach yourself 'rhetoric': an analysis of Philip Larkin's 'Church Going'" in *Twentieth-Century Poetry: From Text to Context*, ed. Peter Verdonk, London: Routledge, 1993.
- 後藤明生 『モダニスト詩以後—英米詩人論』 開文社 1994.